

いしかわ を掘る

観法寺墳墓群(金沢市)

石川県民大学校開設講座

令和5年 **2月26日(日)**

13:00~16:30

石川県地場産業振興センター
新館コンベンションホール

金沢市鞍月2丁目20番地

〈報告遺跡〉

- | | | |
|-----|------------------------------------|-------|
| 報告① | <small>ひとつはり</small>
一針C遺跡 | (小松市) |
| 報告② | <small>みなみしんぼ</small>
南新保遺跡群 | (金沢市) |
| 報告③ | <small>かんぽうじふんぼく</small>
観法寺墳墓群 | (金沢市) |
| 報告④ | <small>みやなが</small>
宮永遺跡 | (白山市) |
| 報告⑤ | <small>みなみのだい</small>
南野台遺跡 | (小松市) |
| 報告⑥ | <small>かなざわじょうあと</small>
金沢城跡 | (金沢市) |

主催：石川県教育委員会・(公財)石川県埋蔵文化財センター
問合せ先：(公財)石川県埋蔵文化財センター普及啓発担当まで
金沢市中戸町18-1 電話(076)229-4477

ホームページ：<https://www.ishikawa-maibun.jp/>

「いしかわ埋文」
で検索!!



令和4年度 発掘報告会

いしかわを掘る

開 会 13:00～

報 告 1 「小松市 ^{ひとつはり} 一針C遺跡」
13:05～ (公財) 石川県埋蔵文化財センター 伊藤 雅文

報 告 2 「金沢市 ^{みなみしんぼ} 南新保遺跡群」
13:35～ 金沢市埋蔵文化財センター 谷口 明伸

報 告 3 「金沢市 ^{かんぼうじ} 観法寺墳墓群」
14:05～ (公財) 石川県埋蔵文化財センター 安中 哲徳

休 憩 10分 (14:35～14:45)

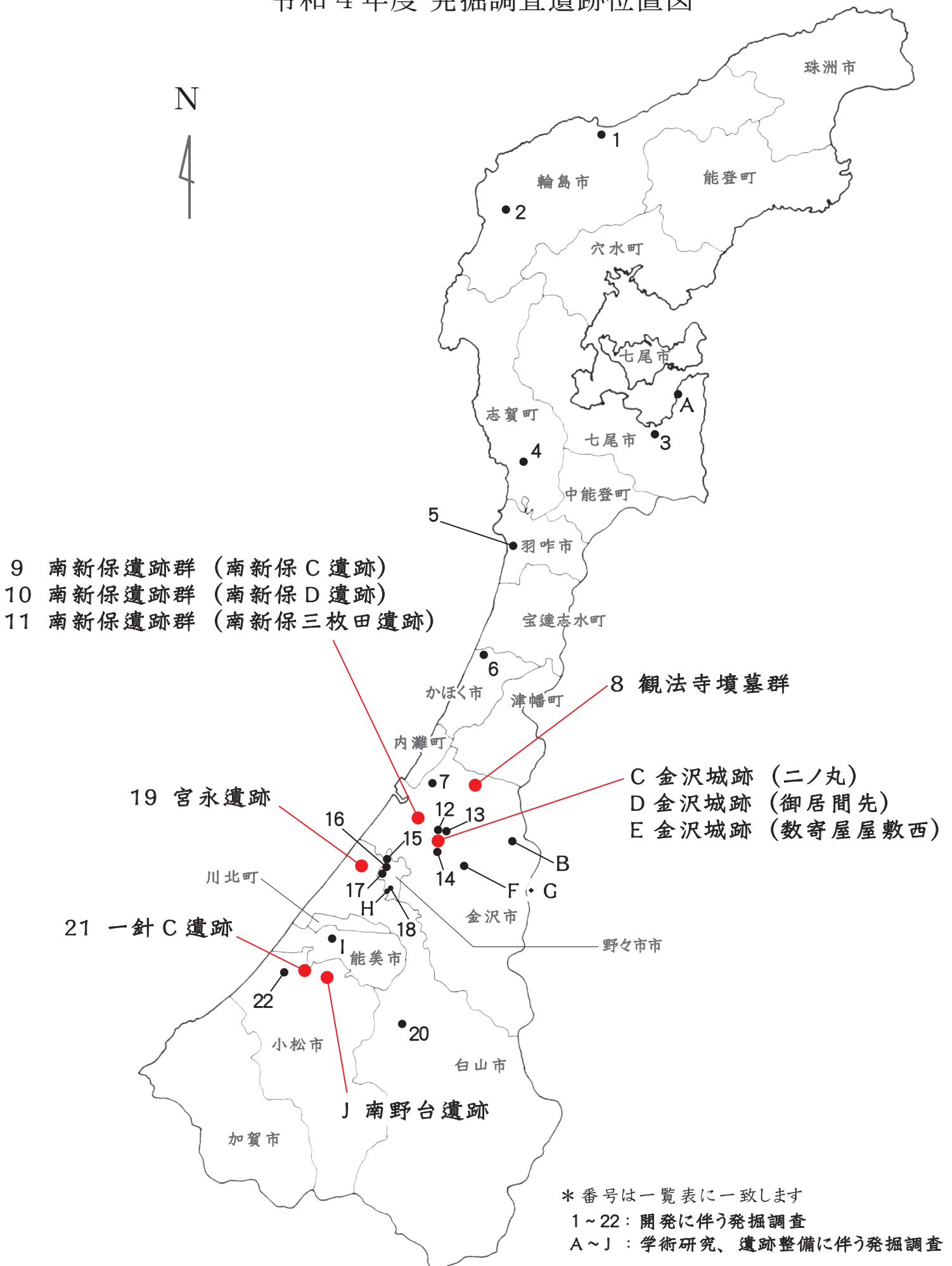
報 告 4 「白山市 ^{みやなが} 宮永遺跡」
14:45～ 白山市観光文化スポーツ部文化財保護課 中江 隆英

報 告 5 「小松市 ^{みなみのだい} 南野台遺跡」
15:15～ 小松市埋蔵文化財センター 村上 昂之

報 告 6 「金沢市 ^{かなざわじょうあと} 金沢城跡」
15:45～ 石川県金沢城調査研究所 塩野 寛人

質 問 15分 (16:15～16:30)

令和4年度発掘調査遺跡位置図



令和4年度 発掘調査遺跡一覧

◎開発に伴う発掘調査

(★は今回報告する遺跡)

No.	遺跡名	所在地	主な時代						面積 ㎡	調査 担当
			縄文	弥生	古墳	古代	中世	近世		
1	宅田上野山遺跡	輪島市宅田町	○			○		○	2,800	県
<p>台地上に立地し、調査区中央にある谷部では縄文時代後期の貯蔵穴や礫群、谷部両岸には掘立柱建物や焼成土坑等からなる古代の集落、谷部東岸には加賀藩「輪島在住」との関係が窺われる近世の掘立柱建物を検出した。</p>										
2	総持寺遺跡	輪島市門前町門前	○	○	○	○	○	○	42	市
<p>○遺構等 土坑、井戸跡 ○出土品 縄文土器24点、須恵器2点、中世陶器3点、土器44点、陶磁器35点、中国陶磁3点、瓦7点、木製品2点</p>										
3	矢田遺跡	七尾市万行町～矢田町		○	○	○	○		2,370	県
<p>古墳時代中期～後期の河跡2条と、同時期とみられる掘立柱建物2棟を確認した他、河底に弥生時代のクリ貯蔵穴を、河岸に沿って古代の水田跡を検出する等、時代によって様変わりする水場利用の変遷が窺われた。</p>										
4	倉垣遺跡	羽咋郡志賀町倉垣		○	○	○			480	県
<p>古墳時代の竪穴建物、平安時代の掘立柱建物、柱穴、川跡を確認した。川跡から古墳時代後期の土師器、須恵器が多量に出土した他、弥生時代後期の土器、奈良・平安時代の須恵器などが出土した。</p>										
5	羽咋古墳群	羽咋市川原町		○	○				200	市
<p>神社移転にかかる発掘調査。土坑、ピット、溝状遺構を検出した。弥生時代末期から古墳時代初期の土器が出土した。</p>										
6	細滝神社遺跡	かほく市二ツ屋		○					35	市
<p>柱穴、竪穴住居の一部を確認した。主に弥生後期～末期の土器片が出土した。</p>										
7	大場遺跡	金沢市大場町			○	○	○		4,940	県
<p>室町時代の屋敷地の区画溝や、平安～鎌倉時代の掘立柱建物と井戸などを検出した。また氾濫・湿地堆積層を挟んで、下層面では古墳時代や古代の溝、土坑などを確認した。</p>										
★	観法寺墳墓群	金沢市観法寺町		○	○	○	○		1,770	県
<p>周溝で区画された弥生時代後期～終末期頃の墳丘墓、弥生時代後期の環濠に囲まれた竪穴建物や大型土坑、中世の配石墓などを確認した。墳丘墓1基の主体部から鉄刀が出土した。</p>										
★	南新保C遺跡	金沢市南新保町		○	○	○			5,400	市
<p>方形周溝墓、掘立柱建物跡、平地式建物跡、溝跡などを検出した。</p>										
★	南新保D遺跡	金沢市南新保町		○	○				900	市
<p>弥生～古墳時代の溝と井戸跡を検出した。</p>										
★	南新保三枚田遺跡	金沢市南新保町		○	○	○	○		5,900	市
<p>方形周溝墓、掘立柱建物跡、溝跡などを検出した。古代の溝跡からは墨書土器が出土した。</p>										
12	金沢城下町遺跡(尾張町1丁目9番地点)	金沢市尾張町						○	94	市
<p>近世北国街道沿いの町家跡の発掘調査。土坑、柱礎石、石列などを検出した。近世陶磁器、土器、木製品などが出土した。</p>										
13	金沢城下町遺跡(主計町3番地点)	金沢市主計町						○	37	市
<p>発掘調査で西内惣構跡の堀及び道跡を検出した。</p>										
14	金沢城下町遺跡(西外惣構跡宮内橋西地点)	金沢市広坂						○	10	市
<p>西外惣構跡の堀土居側石積の修理に伴い、裏込部分の調査を実施した。</p>										
15	御経塚オツソ遺跡	野々市市長池	○	○				○	1,676	市
<p>弥生時代後期の集落跡の発掘調査。竪穴建物や平地式住居から多数の弥生土器が出土した。また、管玉など玉製品やその未成品が出土していることから、集落では玉作りを行っていたと考えられる。</p>										

(★は今回報告する遺跡)

No.	遺跡名	所在地	主な時代					面積 ㎡	調査 担当	
			縄文	弥生	古墳	古代	中世			近世
16	三日市A遺跡	野々市市二日市	○	○		○	○	○	425	市
	中世の掘立柱建物2棟と建物の方位にあった溝も確認した。また、今回確認した建物は、過去に当該地周辺の発掘調査で確認した掘立柱建物と方位がほぼ同じであることを確認した。									
17	田尻ジッタ遺跡	野々市市田尻町	○				○	○	4,756	市
	発掘調査で中世後半の集落を確認した。多数の掘立柱建物と竪穴状遺構を検出し、大型の溝で区画された方形の宅地も確認した。青磁や瀬戸焼天目茶碗などの陶磁器や、鏝羽口、鉄滓などが出土した。									
18	末松遺跡	野々市市中林	○	○	○	○	○		3,445	市
	発掘調査で古代及び中世の集落を確認した。古代は竪穴建物3棟、掘立柱建物1棟、中世では掘立柱建物複数棟と多数の竪穴状遺構を検出した。									
19	宮永遺跡	白山市旭丘		○	○	○			715	市
★	掘立柱建物と竪穴建物、土坑を確認した。弥生土器や須恵器、土師器等が出土した。									
20	下吉谷遺跡	白山市下吉谷町	○	○					410	市
	遺物包含層を確認した。縄文土器や近世の碗が出土した。									
21	一針C遺跡	小松市一針町		○	○	○	○		3,570	県
★	弥生～古墳時代の川跡、土坑、溝、および竪穴建物、中世の水路や、井戸等を確認した。弥生中期の玉作関連遺物を出土する土坑がある。									
22	八日市地方遺跡	小松市日の出町	○	○				○	2,200	市
	大規模環濠集落の調査。過去の調査と合わせ、埋積浅谷(旧河道)の左岸居住域を半円に取りまく多重環濠のほぼ全体像が明らかとなった。また環濠周縁には墓域が展開し、環濠から弥生時代最古の石製指輪が出土した。									

調査担当 市:市教育委員会 県:県埋蔵文化財センター

◎学術研究、遺跡整備に伴う発掘調査

(★は今回報告する遺跡)

No.	遺跡名	所在地	主な時代						面積 ㎡	調査 担当
			縄文	弥生	古墳	古代	中世	近世		
A	三室まどがけ1号墳	七尾市三室町			○				235	市
令和3年度に石室、令和4年度に墳丘の3次元測量調査を実施した。										
B	荒山城跡	金沢市荒山町						○	77	市
加賀・越中国境に築かれた山城。主郭、大堀切、曲輪などでトレンチ調査を実施し、遺構の規模を確認した。										
C	金沢城跡(二ノ丸)	金沢市丸の内						○	2,000	城
★	二ノ丸御殿復元整備に伴う確認調査。二ノ丸御殿の北東部(表式台、虎ノ間、実検ノ間、広縁)に対応する礎石根固め列等を確認した。									
D	金沢城跡(御居間先)	金沢市丸の内						○	30	城
二ノ丸御殿に付属する庭園・馬場などの屋外空間について遺構を確認するための調査。白色粘土を貼った池の一部や池以前の遺構を確認した。										
E	金沢城跡(数寄屋敷西)	金沢市丸の内						○	200	城
数寄屋敷西堀縁石垣の保全に伴う解体調査。1～3段目の解体調査を実施。近代及び近世後期の修理痕跡と、石垣構築当初の可能性のある裏込め層を確認した。										
F	涌波遺跡	金沢市涌波町						○	25	市
辰巳用水管理通路法面の石積整備に伴う発掘及び測量調査。										
G	涌波遺跡	金沢市涌波町						○	80	市
土清水塩硝蔵跡の史跡整備に伴う遺構確認調査。辰巳用水の水流を引き込むための水路跡などを確認した。										
H	末松廃寺跡	末松二丁目	○	○	○	○	○	○	45	市
金堂南西隅の発掘調査を行い、金堂の建物の地盤改良(掘込地業)を確認した。また、改良の手段として、面的に多量の玉石を敷き並べるといった類例の少ない工法が採用されていることを確認した。										
I	西山古墳群	能美市徳久町			○				24	市
古墳の周溝・埋葬施設を確認調査。鉄製品等が出土した。										
J	南野台遺跡	小松市古府町	○	○	○	○	○		27	市
★	加賀国総社推定地の確認調査。古代の礫敷遺構、中世の礎石総柱建物を確認した。									

調査担当 市:市教育委員会 城:県金沢城調査研究所

ひとつはり
一針C遺跡

公益財団法人 石川県埋蔵文化財センター
伊藤雅文

所在地 小松市一針町地内
調査原因 梯川河川改修（国土交通省北陸地方整備局金沢河川国道事務所）
調査期間 令和4年4月13日～6月10日、10月11日～令和5年1月27日
調査面積 3,570㎡
主な遺構 竪穴建物、掘立柱建物^{ほったてばしら}、井戸、土坑、川跡、溝、環濠、小穴
主な遺物 弥生土器、土師器^{はじき}、須恵器^{すえき}、陶磁器、石器、管玉未成品^{くだたま}、木製品、金属製品

1 何年にもわたった発掘調査

発掘調査は、建設される新堤防と旧堤防を撤去後の場所および河川敷が対象です。河川敷では、6～9月末の期間（増水期）の工事等掘削が法律で禁止されているので、発掘調査ができません。平成29年以降の調査は増水期をはさんだ春と秋・冬の限られた期間（渇水期）のみ発掘作業が可能なので、作業が細切れとなって、とても難しい調査でした。

	調査年	期間	調査面積	調査区・遺構面	調査略報等
堤防	H25	8/1-11/20	1,800	F区	情報誌32号、いしかわの遺跡46
	H26	5/12-2/13	7,600	A区、B区(2面)、C区、D区(2面)、E区(2面)	情報誌34号、いしかわの遺跡49
	H27	4/20-10/30	3,500	G区(2面)、H区(2面)	情報誌36号、いしかわの遺跡51
河川敷	H29	10/3-2/14	3,480	I区上・下層、J区上・下層	情報誌40号
	H30	10/2-2/15	2,200	K区上・中・下層	情報誌42号、いしかわの遺跡61
	R元	4/10-6/4	4,400	K区下(西)、L区上層	情報誌43号、いしかわの遺跡64
		10/16-2/21		L区上(西)・中・下層、M区上・中・下層	
	R2	4/8-6/2	3,120	L・M区下・最下層、N区上・下層	情報誌44号
		10/16-1/14		N区最下層、O区上・下層	
	R3	4/12-6/10	4,340	P1・P2区上層、Q区上層	情報誌46号、いしかわの遺跡68
		10/5-12/15		P1区下層、Q区下層、S区上層	
	R4	4/13-6/10	3,570	P2区下層、R区上層、S区中層	情報誌48号予定、いしかわの遺跡71
		10/11-1/27		P3区下層、R・S区下層	
合計			34,010		

一針C遺跡調査区割図



2 一針C遺跡の特徴

本遺跡は、梯川の氾濫禍を被る場所なので、土砂の堆積により複数の時代の生活した痕跡が重複して見つかりました。調査では、次のように把握しました。

上層；古墳時代～中世…調査区の全面で検出しました。

中層；古墳時代～中世…部分的に見つかっており、L・K区を中心に検出しました。

下層；弥生時代中期～古墳時代前期…調査区の全面で検出しましたが、A・C区は上層と同じ高さで見つかったため、同時に調査しました。

3 弥生時代～古墳時代



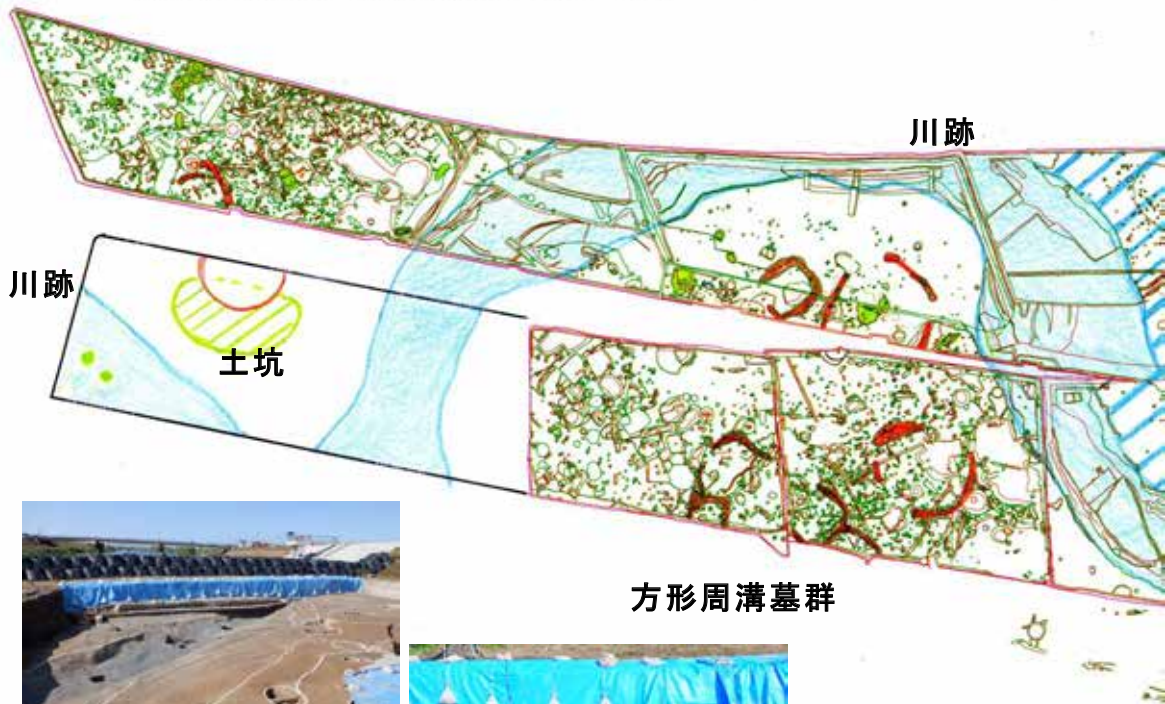
平成 25 年調査着手時の梯川



弥生時代の土坑、墓か？

一針C遺跡過年度合成図(下層)

S=1/1000



西端を流れる川跡
川底にドングリピット



川跡の堆積
黒い有機土層が厚く堆積



川跡から遺物出土



古墳時代前期の井戸



古墳時代末の掘立柱建物



平地式建物の調査



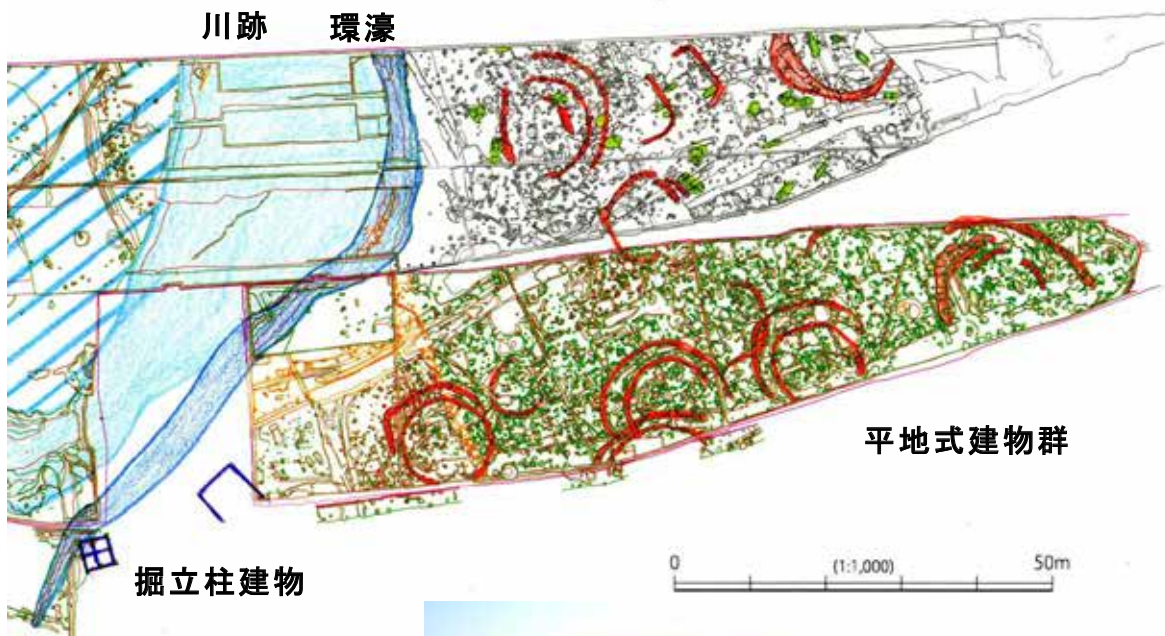
弥生時代の環濠、集落と墓を区画



弥生時代の大きな土坑、墓か



川跡 環濠



環濠の様子



平地式建物群、溝が幾重にも周る



弥生時代後期の平地式建物

4 古代～中世



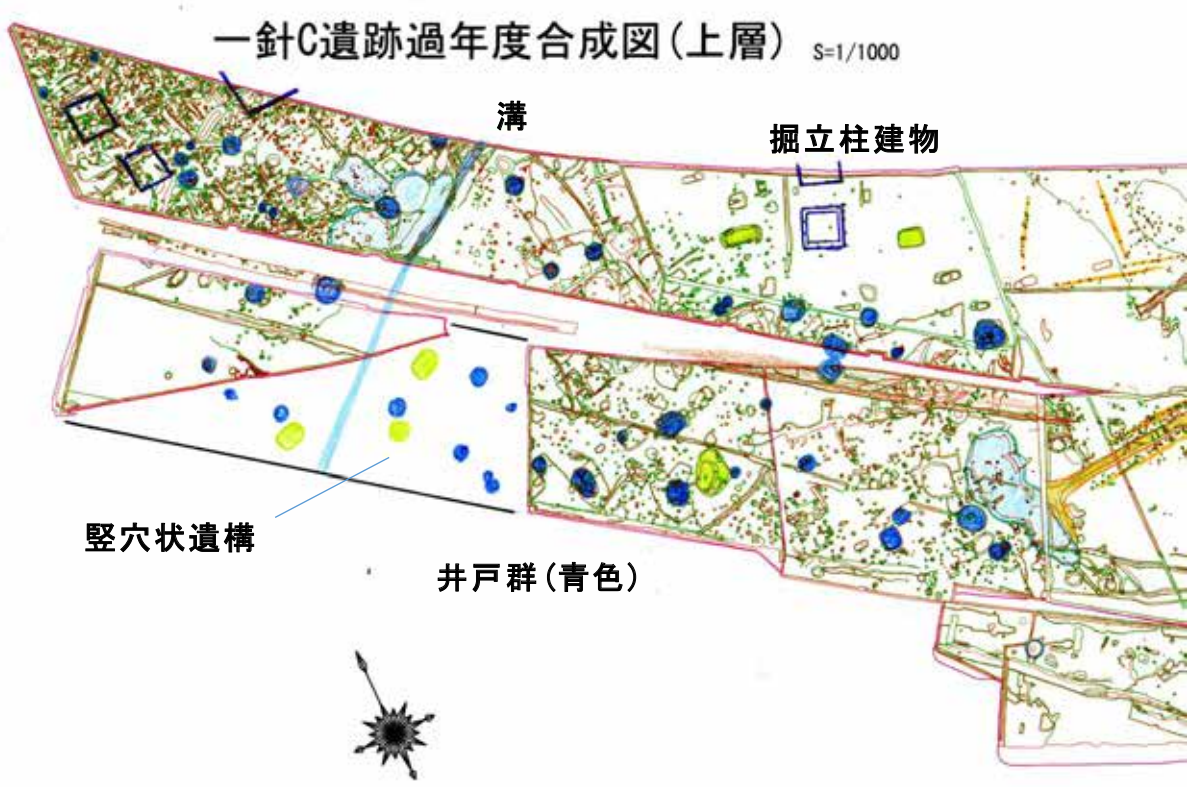
切石組の井戸



縦板組の井戸



せいろ組の井戸内部に
割貫木材の井筒



石等投げ込み井戸廃棄



竪穴状遺構石を投げ込んで埋立て



大きな穴に捨てられたタモ柄



密集する井戸



割り貫き木材の井戸



桶を使った井戸



枠のない井戸

水路と畔

掘立柱建物



水路

掘立柱建物

道？

屋敷の区画溝

K・L・M・N区中層



水田畔と水路



井戸から三具足出土



5 令和4年度の発掘調査

P2・3区下層、S区中・下層。R区上・下層を調査し、本遺跡にかかる全ての発掘調査を完了しました。P区ではB・D・M区から続く環濠を調査し、弥生時代後期に埋没したことがわかりました。R・S区上層では中世の井戸など、下層では弥生～古墳時代前期の集落を確認し、弥生時代に管玉を作っていました。そして、2本の河跡から、弥生ムラの全体像がみえてきて、R・S区が遺跡の西端にあることも確認しました。



P 区の弥生時代環濠掘削



空中から遺跡を俯瞰、白山を望む



R・S 区の弥生時代中期の川跡



大きな穴から碧玉破片がたくさん出土



R・S 区の古墳時代竪穴建物



R 区の中世の井戸、井戸杵が抜かれています

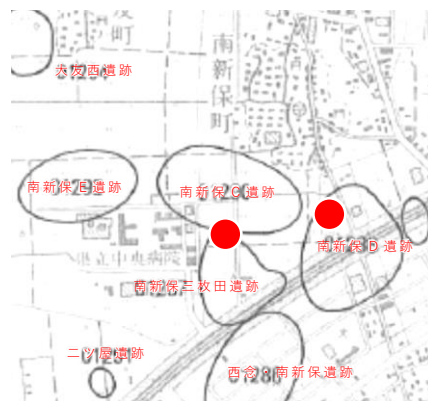
6 まとめ

一針C遺跡では弥生時代中期前葉から人が住み始め、古墳時代中・後期の活動停滞期を挟み、中世まで活発な人の動きがあることがわかりました。新たな歴史が見えてきました。

みなみしんぼいせきぐん
南新保遺跡群

金沢市埋蔵文化財センター
谷口 明伸

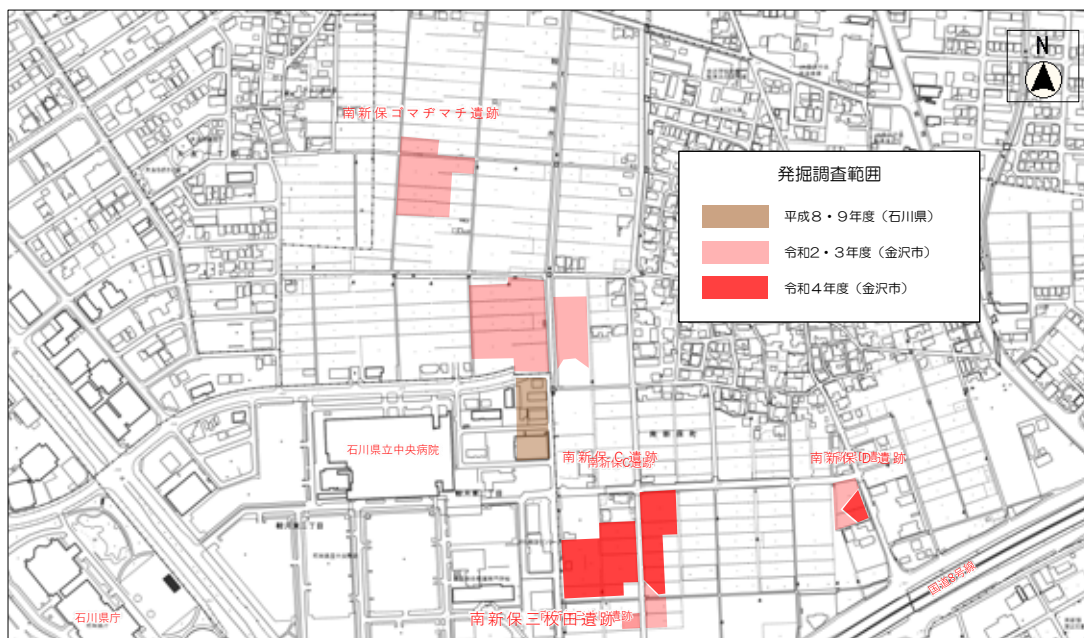
所在地	金沢市南新保町地内
調査原因	南新保土地区画整理事業
調査期間	令和4年7月13日～令和5年3月31日
調査面積	12,200 m ²
主な遺構	方形周溝墓、掘立柱建物、平地式建物、溝、土坑 など
主な遺物	弥生土器、土師器、須恵器、墨書土器、木製品、石製品 など



調査区位置図 (S=1/25,000)

1 立地と周辺環境

南新保遺跡群は金沢市の北西部、石川県庁から西に約1キロの地点に位置します。現在は水田や果樹園が広がる田園風景ですが、かつては沼が拡がり小川が網目状に流れる低湿地であり、その中の微高地上に複数の遺跡が点在していたようです。周辺には南新保A～E遺跡、南新保三枚田遺跡のほか、弥生時代の大集落である西念・南新保遺跡などが分布しています。



発掘調査区位置図

2 南新保遺跡群の発掘調査

南新保遺跡群とは南新保土地区画整理事業に伴い発掘調査を行っている遺跡の総称で、区画整理事業地内に分布する①南新保C遺跡、②南新保D遺跡、③南新保^{さんまいだ}三枚田遺跡、④南新保ゴマチマチ遺跡、の4遺跡が含まれます。発掘調査は令和2年度から実施されており、令和4年度は上記①②③遺跡で約12,200 m²の発掘調査を実施しています。また、過去には

石川県及び金沢市により、南新保C遺跡、同D遺跡、同三枚田遺跡などで発掘調査が行われています。

3 令和4年度の発掘調査

本年度の南新保遺跡群発掘調査では、以下の遺跡の調査を実施しています。

遺跡名	主な時代	主な遺構
南新保C遺跡	弥生時代中期～終末期	方形周溝墓、建物跡、溝、土坑
	古墳時代前期	
	奈良・平安時代	溝
	鎌倉・室町時代	建物跡
南新保三枚田遺跡	弥生時代中期～終末期	方形周溝墓、建物跡、溝、土坑
	古墳時代前期	
	奈良・平安時代	溝
	鎌倉・室町時代	土坑
南新保D遺跡	弥生時代中期～古墳時代前期	溝、井戸跡



南新保遺跡群遠景

(1) 南新保C遺跡・南新保三枚田遺跡

本年度は両遺跡計 11,300 m²の発掘調査が行われており、弥生時代中期から古墳時代前期、奈良・平安時代、鎌倉・室町時代の遺構と遺物が出土しています。

【弥生・古墳時代】

本年度に発掘調査した両遺跡の主体となる時代です。方形周溝墓、平地式建物、掘立柱建物、河川、溝、土坑などが検出されています。

南新保 C 遺跡と南新保三枚田遺跡は遺跡地図上では別遺跡ですが、発掘調査の結果、同一遺構が複数検出される一連の遺跡であると考えられるため、ここでは両遺跡を合わせて報告します。

■ 方形周溝墓

方形周溝墓とは、方形または長方形の墳丘を造り、その周囲に溝（周溝）を掘って区画した墳墓のことで、弥生時代から古墳時代前期まで全国的に造られました。弥生時代前期に近畿地方で出現したとされますが、石川県では中期以降に見られるようになります。周溝の形状により平面形態には様々なバリエーションがあり、本年度の調査では①周溝が全周するもの、②周溝の四隅を掘り残すもの、③周溝の二隅を掘り残すもの、



方形周溝墓③

④周溝の一隅を掘り残すもの、の4形態が確認できます。通常、方形周溝墓の埋葬施設は墳丘上に造られますが、両遺跡では墳丘が既に削平されているため、埋葬施設は痕跡も含め確認されていません。造営時期の決め手となる出土遺物の量が少ないものの、弥生時代中期から後期にかけてのものが主体となるようです。また、大きさや方位軸に数パターンを見ることができ、これが造営時期の差を示す可能性があります。

■ 平地式建物

本年度の発掘調査では、計 3 棟の平地式建物を確認しています。平地式建物とは、地面を掘り下げて床面とする竪穴建物に対し、床面の高さが地表面にある建物のことを指し、本遺

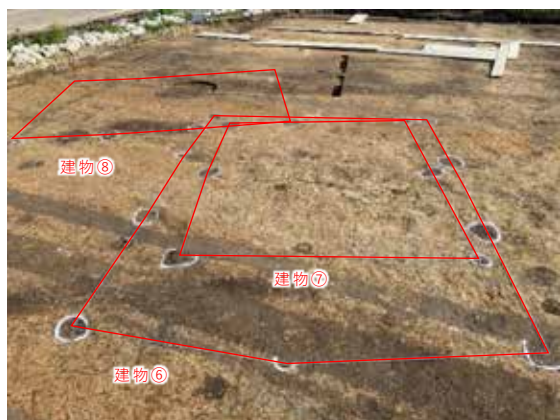
跡では建物の周溝となる円形溝の検出を以て平地式建物跡と判断しています。いずれも周溝の内側に柱跡と思われる複数の小穴が確認されており、出土土器から概ね弥生時代後期から古墳時代前期のものと考えられます。

■ 掘立柱建物

掘立柱建物は、地面に置いた礎石の上に柱を立てる礎石建物に対し、地面に掘った穴に柱を直接立てる形式の建物のことで、本年度の調査では計 8 棟の掘立柱建物を検出しており、うち 7 棟（建物④～⑩）が弥生時代後期から古墳時代のものと考えられます。建物④及び⑨は筋状の溝の堀方内に隅丸方形または円形の柱穴を掘って柱を据える、いわゆる布堀建物で、特に建物④には全ての柱穴内に礎板（柱の沈み込みを防ぐために入れる木の板）が残存していました。これらの詳細な時期判定は今後の調査課題ですが、方形周溝墓より後に建築されたものが見られるため、墓域から居住域への変遷が想定されます。



平地式建物③



掘立柱建物⑥・⑦・⑧



掘立柱建物⑨・⑩

■ 河川／溝

本年度の調査では大小様々な溝跡を検出しています。特に溝③及び④からは土器、木製品、石製品などが良好な状態で出土しており、近くの集落から廃棄された状況が想定されます。特に木製品では、木製容器、一木梯子、台状木製品、梶（紡いだ糸を巻き取る道具）、鍬、桶など、当時の居住者たちの生業を示す遺物が出土しています。なお、溝④より東側は地山が落ち込む低湿地となって遺跡の分布が見られないことから、何らかの区画のような役割を持っていた可能性があります。また、溝③から枝分かれする溝⑦は方形周溝墓⑤の墳丘を迂回するように屈曲することも注目されます。



溝④ 土器出土状況



木製容器



台状木製品



棒



鍬



桶

■ 土坑

土坑①及び②は直径約2m、深さ約 1.5m を測る平面円形の土坑です。両者とも堀方の底面は隅丸方形で、覆土からは土器とともに大量の木製品が出土しています。土坑①からはほぼ完形の甕が2点出土していること、土坑②には木製品の上に 20 cm大の礫を乗せていること、などの特徴があります。



土坑① 遺物出土状況



土坑② 遺物出土状況

【奈良・平安時代】

当該期の遺構・遺物は少なく、溝1条の検出に留まります。溝⑥は粗い砂質土を主体とした覆土中に混入と思われる弥生～古墳期の土器片が出土し、その中に須恵器・土師器を主体とした当該期の遺物が含まれます。須恵器には「伴」「三野」などの墨書土器も含まれており、特に前者は須恵器無台坏の内面に墨書する希有な例として注目されます。

本年度の発掘調査では当該期の遺構・遺物ともに限定的ですが、過去の調査では平安時代の船材が出土した河川跡や掘立柱建物、井戸などの遺構から墨書土器や齋串、人形などの特徴的な遺物が出土しており、遺跡周辺は当該期においても人々の生活にとっての要所であったと考えられます。



墨書土器「伴」



墨書土器「三野」

【鎌倉・室町時代】

当該期の遺構・遺物も少なく、建物1棟と土坑3基の検出に留まります。建物⑪(柱間4×6間)は遺物の出土を見ていませんが、碁盤目状に柱を立てる総柱型の平面を持つことから中世(鎌倉～室町期)に属するものと思われます。遺構の数は少ないものの、当該期においても南新保遺跡群周辺においては人々の生

活が営まれていたようです。

(2) 南新保D遺跡

南新保D遺跡は昭和48年(1973年)に国道8号線の建設工事中に発見された遺跡で、これまでの発掘調査で弥生時代中期から古墳時代前期の遺構と遺物が検出されています。本年度は約900㎡の発掘調査を行い、弥生時代終末～古墳時代前期の溝1条と井戸1基を検出しています。このうち、溝SD01は幅約1m、深さ0.1～0.2mの規模があり、溝の底面から大量の土器が出土しています。これらは細かな破片が多く、溝への廃棄であったと考えられます。他に以外に目立った遺構はなく、調査区中央に近代の遺物が出土する河川跡が通っています。遺構は上面が削られて底面のみ残存するような状況であるため、近代遺構の開墾等により遺跡全体が大きな削平を受けた状態であると考えられます。



溝 SD01 遺物出土状況



井戸 SEO1

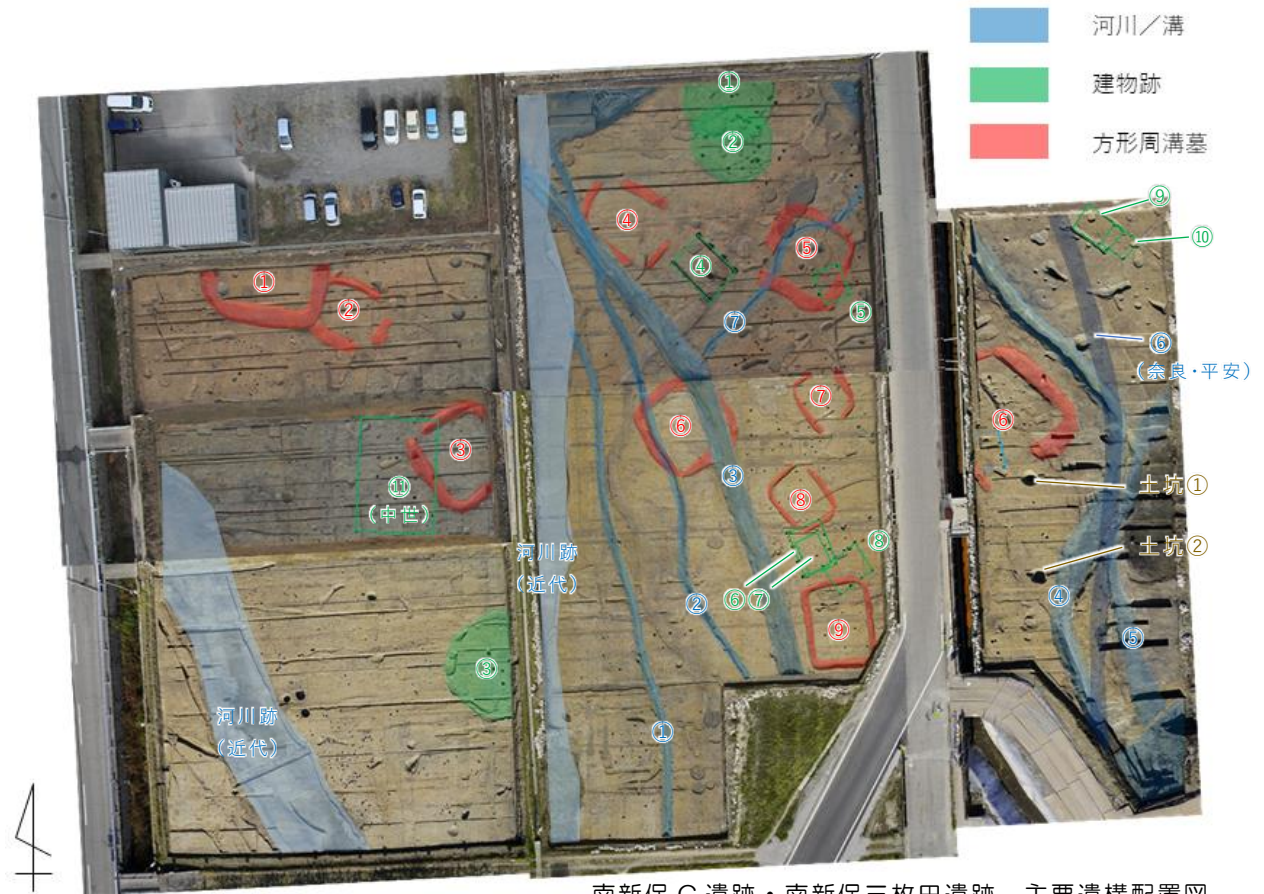
4 まとめ

【弥生時代～古墳時代】

南新保C遺跡・南新保三枚田遺跡では、計10基の方形周溝墓を検出し、一大墓域ともいえる地区を形成していることが判明しました。しかも周溝の平面形に様々なタイプが見られることは、東海～関東地方のように四隅が切れるタイプから全周するタイプへの変遷を見せるわけではなく、これらが並行して造営されたという地域性を見いだすことができます。さらに、方形周溝墓の後に掘立柱建物が建築されているように、墓域と居住域の境界が変遷する様子も看取されます。また、過去の調査において、本年度調査区の北北西約200mの地点で墓域が検出されており、墓域の範囲が本年度調査区まで拡大する可能性を見せています。各方形周溝墓の造営時期とその変遷については出土遺物を整理した後に詳細検討する必要がありますが、周辺における弥生時代中期から古墳時代前期における墓制のあり方を示す結果が期待されます。

【奈良～平安時代】【鎌倉～室町時代】

当該期の特徴的な遺構・遺物が定量出土しているもののその総数は限定的であるといわざるを得ませんが、古墳時代以降も連綿と人々の営みが続く地域であったことがわかります。



南新保 C 遺跡・南新保三枚田遺跡 主要遺構配置図
 ※注記のない遺構はすべて弥生中期～古墳前期



南新保 D 遺跡 主要遺構配置図



溝④



方形周溝墓⑨ 検出状況

かんぼうじふんぼぐん
観法寺墳墓群

公益財団法人 石川県埋蔵文化財センター

調査部 安中 哲徳

所在地	金沢市観法寺町地内
調査原因	一般国道159号 金沢東部環状道路改築事業
調査期間	令和4年6月2日～令和5年3月3日(予定)
調査面積	1,770m ²
主な遺構	墳丘墓、周溝、環濠、竪穴建物、竪穴状遺構、柱穴、土坑、溝、集石墓
主な遺物	弥生土器、土師器、須恵器、珠洲焼、加賀焼、石製品(砥石・玉関連緑色凝灰岩等)、金属製品(鉄刀・鉄鏃・鉄製 鈎 等)、ガラス製品(ガラス小玉)、土製品(鞆羽口)、鉄滓

1 遺跡の位置と周辺の遺跡について

観法寺墳墓群は、河北潟から南東約5kmの金沢市北東部に位置し、河北潟へと流入する森下川右岸の森本丘陵から潟方向へと舌状に伸びる標高40m台の尾根上に立地しています。平成14(2002)年度に確認調査が行われ、弥生時代後期～古墳時代前期の墳墓群と、北東側斜面には古墳時代後期の観法寺ジンヤマ横穴が確認されています。

谷部を挟んだ北側の尾根上には、過去に弥生時代末と古墳時代初頭頃の墳墓が発掘調査された観法寺古墳群があり、斜面には中世の山林寺院の存在も想定されています。また、尾根先端の下方には弥生時代～中・近世の複合遺跡である梅田B遺跡や古代北陸道の側溝が見つかった観法寺遺跡などが広がり(調査が行われており)、谷部奥の観法寺谷遺跡では、中世に水に関わる祭祀が行われたと考えられる遺構・遺物が見つっています。



観法寺墳墓群の位置(S=1/25,000)



調査区位置図(S=1/25,000)

- ① 観法寺墳墓群
- ② 観法寺ジンヤマ窯跡
- ③ 観法寺ヤッタ遺跡
- ④ 観法寺ジンヤマ横穴
- ⑤ 観法寺古墳群
- ⑥ 観法寺谷遺跡
- ⑦ 観法寺瓦窯跡
- ⑧ 観法寺横穴群
岩出1号墳
- ⑨ 観法寺窯跡
- ⑩ 伝弥勒寺跡



観法寺墳墓群と周辺の遺跡

観法寺墳墓群の南斜面には観法寺ジンヤマ窯跡が造られ、7世紀後半代の須恵器と共に軒丸瓦、平瓦などが焼成されていました。また、観法寺ヤッタ遺跡が広がる南側谷部奥には平安時代末頃の祭祀的空間が存在していたとみられます。谷部を挟んだ南側の丘陵

には、観法寺窯跡や観法寺瓦窯跡、観法寺横穴群・岩出1号墳などが所在しています。

周辺には、他にも弥生時代から近世に至る様々な遺跡が確認されており、水陸交通を利用した人々の活発な活動がうかがわれる地域です。



観法寺墳墓群周辺の遠景



調査前の観法寺墳墓群

2 発掘調査の概要

一般国道159号・金沢東部環状道路(通称山側環状道路)改築(観法寺パーキングエリアの設置)に伴い、現在反対車線側にある観法寺パーキングエリアの西側で、平成30(2018)年度、令和2(2020)年度の観法寺ヤッタ遺跡、観法寺ジンヤマ窯跡の調査に続き、令和3(2021)年度は尾根上の観法寺墳墓群Ⅰ区とⅢ区、尾根北斜面の観法寺ジンヤマ横穴を調査しました。令和4(2022)年度は尾根上の観法寺墳墓群Ⅱ区の調査を実施しました。

観法寺古墳群の昨年度の調査では、尾根の西側部分(Ⅰ区)で、弥生時代後期～終末期の墳丘墓5基と弥生時代後期後半の大型土坑2基の他、中世～近代の墓を確認しました。

今年度の調査では、尾根中央部分で、弥生時代後期後半～終末期とみられる墳丘墓3基が新たにみつけられました。中でも1号墓は四隅突出型墳丘墓の可能性があり、主体部(埋葬施設)からは、鉄製の短刀が出土しました。他にも、弥生時代後期後半の土器や石器・鉄製品が出土した方形の竪穴建物1棟や大型土坑9基に加え、北側斜面では集落を囲む環濠の存在も新たに確認したことから、高地性環濠集落であることが判明しました。



【弥生時代】

(1) 墳丘墓

尾根を溝で区画する墳丘墓を8基確認しました。南北斜面の崩落が著しく全形は不明ですが、全長約5～12mで方形状を呈するとみられる墳丘墓が多くみついています。

・1号墓…墳丘の四隅が飛び出た平面形を呈し、全長約12.5mの四隅突出型墳丘墓の可能性があり、石川県内では類例の少ない墳形です。周溝も他と違い直線状ではなく、弧を描くように掘られていました。墳丘には複数の埋葬施設が重複してつくられており、第1主体部aの全長約2.1m、上幅約70cmの箱形木棺部分からは、全長31cm、幅2.7cmの鉄製の短刀が出土しています。茎に切断痕があり、素環頭部分が切断された刀の可能性もあります。中心となる第1主体部bは全長約6.5m、上幅約2.6m、深さ約50cmの長大な墓壇内に、全長約5m、幅約80cmの箱形木棺の痕を検出し、ガラス小玉が出土しました。外側には木槨の痕跡もみつかりました。弥生時代後期後半～終末期頃の築造と考えています。

・7号墓…推定全長約20mと最大ですが、後世に上部が削平され、埋葬施設は残っていませんでした。また、海側の平坦面も含め前方後方墳であった可能性があります。墳丘盛土の下からは、弥生時代後期後半～終末期とみられる大型土坑群がみつかりました。



令和3年度 I 区の遠景



I 区墳丘墓群の全景



2号墓(奥)と3号墓(手前)の全景(I 区)



3・4号墓間を区画する周溝(I 区)



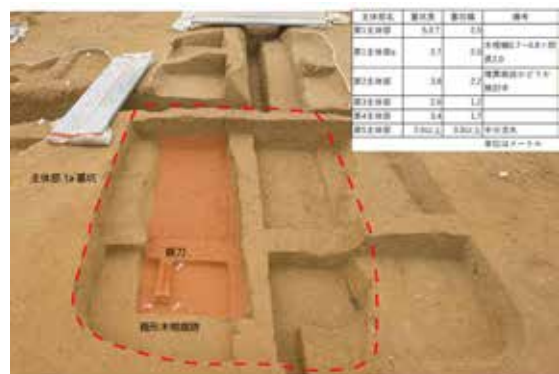
1号墓(奥)と竪穴建物(手前)の全景



1号墓(四隅突出型墳丘墓か)全景(I・II区)



1号墓主体部の位置(I・II区)



1号墓第1主体部 a の木棺痕跡(I・II区)

主体部名	幅(m)	長さ(m)	備考
第1主体部	5.87	2.7	
第2主体部	5.7	2.6	本構(幅)より4.8mの距離に位置
第3主体部	3.6	2.2	埋没(埋没)の跡
第4主体部	3.6	1.7	
第5主体部	5.6	1.4	
第6主体部	5.0	3.0	中継部



1号墓第1主体部 b の木棺痕跡(Ⅰ・Ⅱ区)
(2) 集落跡



第1主体部 a 出土の鉄製短刀

- ・環濠…7号墓北側斜面で尾根を巡るとみられる断面V字形の環濠(壕)を延長約20mに渡り確認しました。後世に上部が削平を受けていますが、推定上幅約6m、深さ約3.5mであったとみられます。溝の下層からは弥生時代後期後半の土器が出土しています。
- ・竪穴建物…約6.9m×6.7mの隅丸方形の建物と考えられ、4本の柱穴を確認しました。また、建物中央やや西寄りの床面からは焼土や灰が残る炉跡を検出しました。建物内や柱穴、壁際を巡る溝からは、弥生時代後期後半頃の土器と共に鉄鏃や砥石・碧玉の剥片が出土しており、ほぼ同じ場所で建て替えられていたことも判明しました。
- ・大型土坑群…尾根上部と斜面に竪穴状に深く掘られた土坑を11基確認しました。規模は径約2～5m、深さ約1～2.5m、平面形態も円形・隅丸方形・方形と様々ですが、底に壁溝と小穴(梯子穴か)を持つ特徴が共通します。Ⅳ区では、弥生時代後期後半の土器がまとまって出土しました。土坑の機能は不明ですが、貯蔵穴の可能性を考えています。



北側斜面を巡る弥生時代後期の環濠(Ⅱ区)



弥生時代後期後半の竪穴建物(Ⅱ区)



弥生時代後期の大型土坑群と環濠(Ⅱ区)



南側斜面に並ぶ2基の方形大型土坑(Ⅳ区)



大型土坑の土層断面(深さ約 2.5m) (Ⅱ区)



底に壁溝が巡る大型土坑(上幅約 5m) (Ⅱ区)

【古代(奈良・平安時代)】

小型の竪穴状遺構や小さな穴(ピット)から、土師器や須恵器が出土しました。北側斜面からは、鉄滓や鞆の羽口といった鍛冶関係の遺物が出土しており、焼土や炭化物が堆積した土坑もみつまっていることから、遺跡内で鍛冶作業が行われていた可能性があります。

【中世(鎌倉・室町時代)】

竪穴建物の上部を造成し、平坦面を造っています。近くの溝から中世の土師器皿がまとも出土しており、この時期に尾根上で儀礼を行っていた可能性があります。尾根に残る小字名の「ジンヤマ」からも中世の砦が存在していた可能性を検討する必要があります。

また、今年度1号墓墳丘の南西部には、上部に集石された土坑がみつき、13世紀後半に作られた加賀焼の甕などが出土しました。周辺から同時期の摺鉢がみつまっていることから甕を摺鉢で蓋をした、中世の集石墓と考えられます。

3 成果のまとめ

2年間に及ぶ調査により、河北潟や森下川を望む舌状に張り出した尾根上に、溝で区画された弥生時代後期後半～終末期頃とみられる墳丘墓が8基築造されていたことがわかりました。中でも1号墓は四隅突出型墳丘墓の可能性があり、県内では調査事例が少ないことから、他地域との関係や築造背景などを今後詳しく調べていく必要があります。

また、墳墓群だけでなく、環濠や竪穴建物、複数の大型土坑等の発見から、県内でも数少ない高地性環濠集落の存在が金沢市北部で初めてみつかった意義は大きいと考えられます。観法寺墳墓群とは別に「観法寺ジンヤマ遺跡(仮称)」と新たな遺跡名を付けることが望ましいです。今後も丘陵上と周辺の弥生時代集落との関係や、遺跡と同時期に直下で発生した森本断層を大きく動かした大地震の遺跡への影響など検討する課題は大きいです。

尾根には弥生時代後期～終末期の墳丘墓だけでなく、古墳時代終末期の観法寺ジンヤマ横穴や中・近世、近代においても、墓域として使用されていたことがわかりました。

本遺跡のある尾根は、河北潟や森下川、周囲の平野を見下ろせる好立地であり、水陸交通路の結節点として、見晴らしのよい場所を選び墓域だけでなく、集落あるいは窯跡などの生産域として、弥生時代以来人々に利用されていたことがわかりました。今後の整理作業により詳細な遺構・遺物の分析・検討や周辺遺跡との比較などを行いたいと考えています。

みやなが
宮永遺跡

白山市観光文化スポーツ部文化財保護課
中江 隆英

所在地 白山市旭丘二丁目地内
調査原因 (仮称)あさひ児童センター建設
調査期間 令和4年11月28日
～令和5年2月13日
調査面積 715 m²
主な遺構 たてあな たてもの ほったてばしら たてもの どこう
竪穴建物、掘立柱建物、土坑
主な遺物 やよいどき はじき すえき
弥生土器・土師器・須恵器



図1 宮永遺跡の位置(1:25,000)

1 はじめに

今回の発表ではあまり知られていない「宮永遺跡」という遺跡についてより多くの人にとってもらうべく、過去の調査の成果と令和4年度調査の成果を折り交ぜてお話しします。

2 宮永遺跡の位置

宮永遺跡は白山市の中でも北側に位置しています。遺跡の中を北陸自動車道が走っており、周辺には四隅突出型墳丘墓が確認されたことで知られる一塚遺跡や、八田中遺跡、八田中ヒエモンダ遺跡、八田小鮎遺跡等数多くの遺跡が密集している。

3 調査の契機

宮永遺跡は過去3度調査が行われており今回は4回目の調査となりました。

第 次調査	調査年	調査原因
第1次調査	昭和45年	北陸自動車道建設
第2次調査	昭和57年	ほ場整備
第3次調査	平成2年	旭工業団地造成
第4次調査	令和4年	(仮称)あさひ児童センター建設

4 過去の調査での成果

宮永遺跡の過去の調査における成果について簡単ですがまとめます。

宮永遺跡の過去の調査で特筆すべき点として、絵画土器の出土が挙げられる。

平成2年次調査にて2点確認され、1点は溝内から、もう一点は竪穴建物より出土している。

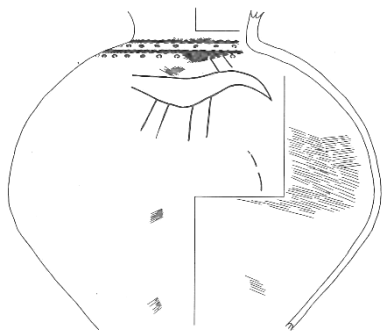


図2 宮永遺跡64号竪穴建物
出土絵画土器(1:6)

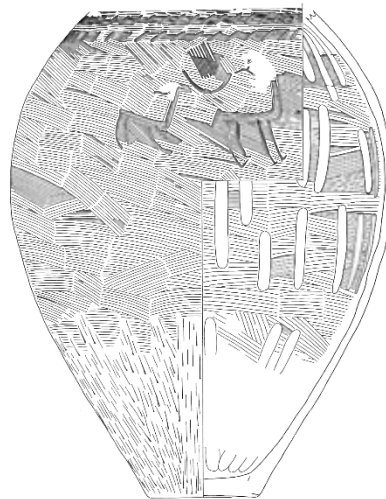


図3 宮永遺跡22号溝出土絵画土器(1:6)

5 令和4年度調査報告

今年度調査は、児童センターの建物部分について調査を行いました。本日は現時点で分かっている範囲で調査結果の方お伝えしたいと思います。

(1) 遺構

【竪穴建物】

調査区東側1棟確認が出来ました。一部は調査区外まで伸びており全形は確認できていません。

建物の大きさとしては、一辺は約4m程です。



写真1 竪穴建物空撮写真

【掘立柱建物】

調査区内では4棟の掘立柱建物を検出。そのうちの1棟は、竪穴建物と切り合う形で確認されている。



写真2 掘立柱建物検出写真



写真3 竪穴建物と切り合う掘立柱建物

【土坑】

調査区内で11基確認できている。



写真4 調査区北側で確認された土坑



写真5 調査区南側の土坑(遺物アリ)

【溝】

調査区南西隅にて確認。遺物等はほとんど確認できていない。



写真6 調査区南西部の溝

(2) 遺物

遺物については、古墳時代中期の須恵器や、古代の甑の把手、土師質の甕、タタキがはいった須恵器等の出土が認められる。



写真7 須恵器の出土状況図

5 今回の調査から分かったこと

・ 竪穴建物と掘立柱建物の時期差

今回の調査で確認された掘立柱建物は、竪穴建物との関係を確認すると、掘立柱建物と竪穴建物には時期差があることがわかりました。また、今回の調査で確認されている掘立柱建物と、過去の調査で確認されている掘立柱建物とで主軸がずれていることから、今回確認された掘立柱建物は、今まで宮永遺跡で確認されていない時期の可能性ががあります。

今後遺物等を整理し、本調査の成果をまとめていきたいとおもいます。



写真8 竪穴建物の壁断面



写真9 調査地垂直空撮写真

【参考文献】

- 石川県教育委員会 1969 『北陸自動車道路関係埋蔵文化財調査概要報告書(1)』
- 石川県教育委員会 1984 『松任市宮永遺跡』
- 松任市教育委員会 1995 『旭遺跡Ⅰ』
- 松任市教育委員会 1995 『旭遺跡Ⅲ』

みなみのだい
南野台遺跡

小松市埋蔵文化財センター
村上 昂之

所在地 小松市古府町地内

調査原因 加賀国府・国分寺関連遺跡確認調査

調査期間 令和4年6月1日～同年7月8日

調査面積 27 m²

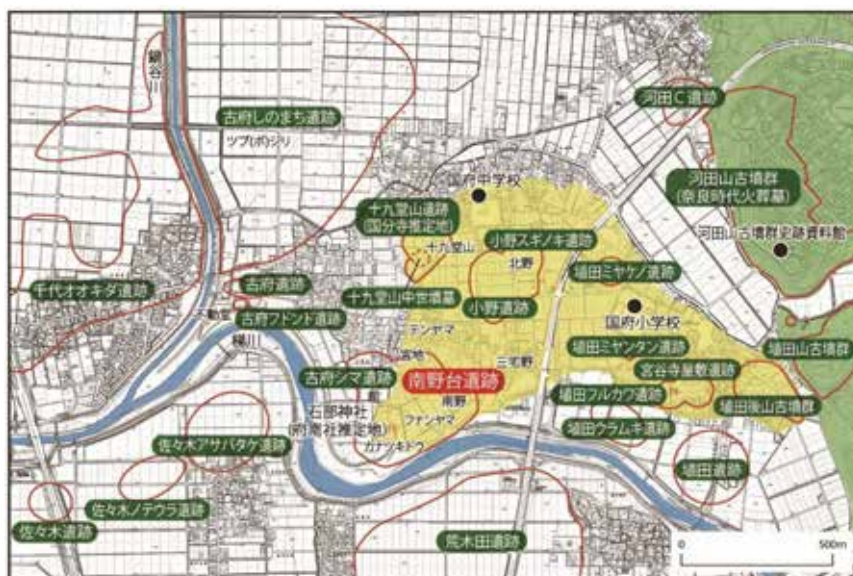
主な遺構 礎石総柱建物、礫敷遺構

主な遺物 縄文土器片、須恵器片、土師器片、陶磁器片、石製品、鉄製品

1 はじめに

平安時代の弘仁14年(823年)、古代律令制のなかで最後の立国となる加賀国が誕生します。その政治、経済、文化の中心地として加賀国府が設置されました。これまでにははっきりとした位置の特定には至っていませんが、『和名類聚抄』等の文献などから、梯川中流域に所在する古府台地が国府推定地と考えられています。台地の南端に立地する南野台遺跡付近には「フナンヤマ」の地名が残り、遺跡内の石部神社境内は加賀国総社「府南社」の有力な候補地となっています。

小松市では、加賀国府・国分寺関連遺跡確認調査を進めており、平成27年度から、この石部神社境内を中心とした南野台遺跡の調査を実施しています。今回は今年度の調査成果と合わせて、これまでの確認調査で明らかになった成果について報告します。



遺跡の位置と周辺図(S=1/25000)



調査地遠景(西から)

今年度の調査成果と合わせて、これまでの確認調査で明らかになった成果について報告します。

2 これまでの調査の経過

① 平成 27 年度の調査

神社境内東側の耕作地を対象として調査に着手しました。調査では土坑や溝が確認されましたが、広い範囲で昭和 33 年に実施された耕地整理の影響を大きく受けていることが明らかになり、以降境内の調査を進める方針へ転換しました。

② 平成 29 年度～令和元年度の調査

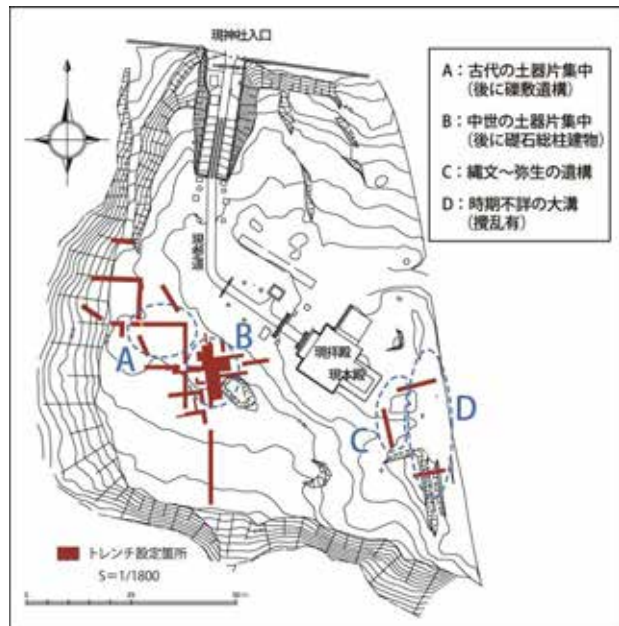
平成 29 年度は境内の地形測量を実施。平成 30 年度には本殿西側のトレンチ調査に着手し、トレンチの 2 箇所で細かく打ち砕かれた古代と中世の土師器片が集中する様子を確認しました(A 区・B 区)。令和元年度には、この下層の調査を継続しながら、本殿東側の遺構確認を行いました。本殿東側では縄文・弥生時代の土坑や近世の可能性のある溝などを検出しました(C・D 区)。

③ 令和 2～3 年度の調査

令和 2 年度、本殿西側で確認した中世の土師器片が集中する整地層の下から、等間隔で東西方向に並ぶ礎石と、それに直交するように南北に並ぶ礎石(痕)を確認し、礎石総柱建物の存在が明らかになりました(B 区)。また、古代の土師器片集中層の下からは、礫や土器片を敷き詰めた礫敷遺構と、それを埋め立てた造成の痕跡を確認しました(A 区)。令和 3 年度からは、これら 2 つの遺構の範囲や性格を明らかにするため調査を進めています。礎石総柱建物については、新しい礎石痕が確認され、礫敷遺構は部分的に構造と規模が明らかになりました。

④ 令和 4 年度の調査

礎石総柱建物の範囲確定のため、建物の北東、東、南西側にトレンチを設定し、調査を行いました。建物の東側については、さらに新たな礎石(痕)を確認し、現社殿が存在する近代の造成土下に中世の整地層が存在していることを確認しました。建物の北東、南西側のトレンチでは、明確な礎石(痕)は確認できず、その方向には建物規模が拡大しないと考えられます。



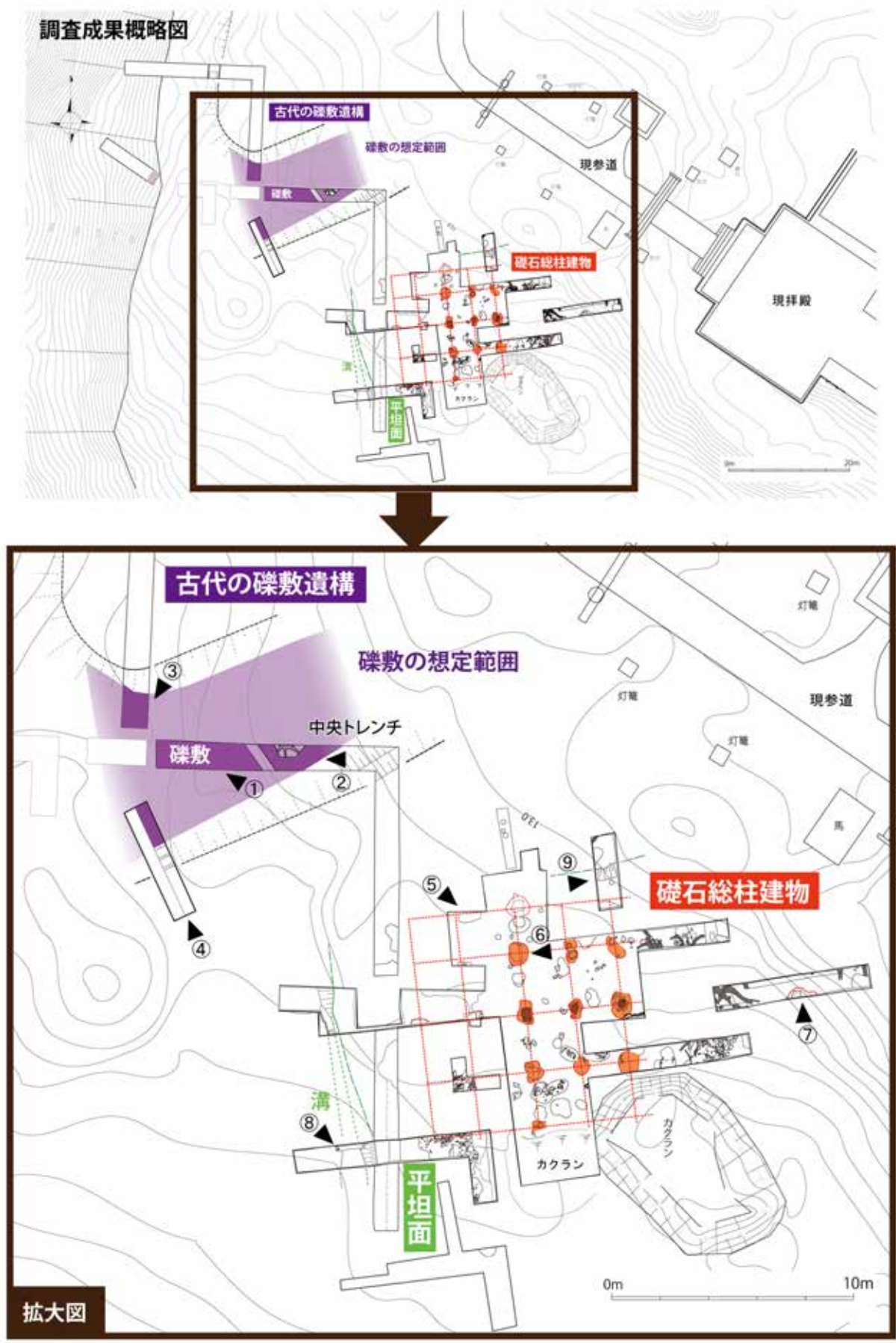
境内トレンチ配置図



中世の土師器片集中(整地層)上面
(B 区・平成 30 年度)



礎石検出状況(B 区・令和 2 年度)



令和4年度までの調査成果概略図

3 調査で発見された2つの遺構について

① 礫敷遺構

地山を溝状に掘りくぼめた底部分に、数cm～10cm程度の礫や須恵器片などを丁寧に敷きつめて構築されています。幅は確認された部分から溝上端約8m、礫敷部分で約5～6mほどになると推定されます。礫敷の上層には、厚さ1m程度の黄褐色粘質土・褐色土の層が存在し、更にその上層に約30cmの平安時代後期(11世紀後半～12世紀前半頃)の土師器片集中層が堆積しています。

遺構の時期については、礫敷面の直上で上位の土師器片集中層と同じく平安時代後期の土師器片を確認していることから、その時期に廃絶したものであると考えられます。また土師器片層と時期差がないことから、間に存在する約1mの層は人為的な造成層であると考えられます。

この遺構の性格については、参道のような道路遺構や、祭祀空間、上面まで一体の整地工事に伴う基礎改良(地業)など、様々な可能性が考えられます。現状では道状に延びることが想定されることから、参道の可能性がもっとも高いと考えられます。詳細な性格や関連する遺構について次年度以降、さらに調査を継続し確認していきます。



① 礫敷遺構の土層状況(南東から)



② 上面から見た礫敷遺構



③ 礫敷遺構端部(北から)



④ 礫敷遺構端部(南から)

②礎石総柱建物

検出された礎石総柱建物は、礎石を据える面を概ね平坦に整え、その面に礎石を配置しています。この平坦面は建物西側では段状に一段下がることが確認されており、その先に礎石は確認されていません。また北側では、これとは逆に一段高くなっており、建物建築のために地形を段状に整形している可能性があります。



⑤礎石総柱建物(北西から)

建物の軸は磁北に揃っており、現状では東西に4間、南北に4間以上の規模になると想定されます。さらに令和4年度の調査によって、新たに建物東側で礎石が確認されたことから、関連する複数の施設が存在していることも想定されます。

建物の時期は、礎石に伴う整地層の下底に含まれる遺物などから室町時代の建物であると考えられます。これ以外にも礎石の基礎や抜き取り痕が多く残っており、同じ場所で複数回にわたって建替えが行われていると判断できます。



⑥礎石の根固め状況



⑦令和4年度に新規確認された東側礎石



⑧平坦面西側の段と溝(北西から)



⑨平坦面北側の段(東から)



中世の土師器片



中世整地層中より出土した鏃

整地層中からは土師器以外にも硯^{すずり}や青磁、白磁などの貿易陶磁、建物に使用されたと考えられる^{かすがい}、加賀焼の破片など、鎌倉時代～室町時代頃(13世紀～16世紀頃)の遺物が出土しています。

4 加賀国総社と調査成果について

総社は、地域の神社を一か所にまとめたもので、11世紀頃から全国的に整備されてきました。加賀国総社は、12世紀後半頃に成立と考えられる『白山之記』の中で、「府南社」が登場しており、この「府南」は、国府の南に位置したことを差し示すと考えられています。寛治5年(1091年)、加賀国司として下向した藤原為房^{ためふさ}の日記『為房卿記』には、一か月程の滞在中に三度、府南社に参拝したことが記載されており、国司がその存在を重要視していたことが窺えます。調査で発見された礎敷遺構は、まさにこの為房が下向した頃の時期に当てはまり、上層で見られる大規模な造成の痕跡は、総社成立による整備との関連が推察されます。



石硯出土状況

また中世には、府南社神主職や府南社御供田を含む得橋郷^{とくはしごう}が、南禅寺の所領となったことが南禅寺の関連文書に記され、14世紀から16世紀頃にかけて度々その名前が登場します。礎石総柱建物は、こうした文献記述の時期と出土遺物の時期が合致しており、中世府南社社殿の一部である可能性が高いと考えられます。特に確認された大量の土師器片を伴う整地の痕跡は、一般的な集落遺跡には認めがたく、周辺では那谷寺遺跡や白山宮に関わる白山市古宮遺跡など、宗教施設に関連した遺跡で確認されています。

今後は、石川県によって調査が行われた石部神社に隣接する古府シマ遺跡の成果などにも検討を重ねていく必要があります。

今年、令和5年(2023年)は、まさに加賀立国1200年の節目の年に当たります。小松市では、引き続き石部神社境内での調査を継続するとともに、隣接地の公園整備や河田山古墳群史跡資料館のリニューアルオープン、周辺の歴史遺産を散策できる仕掛けづくりなど、加賀国府に関連した取り組みを実施していきますので、ご注目いただければ幸いです。

金沢城跡（二ノ丸）

石川県金沢城調査研究所

塩野 寛人

所在地 金沢市丸の内地内
 調査原因 金沢城公園整備
 調査期間 令和4年5月9日～12月16日
 調査面積 2,000 m²
 主な遺構 礎石建物、便所遺構
 主な遺物 飾金具、陶磁器、瓦



図1 遺跡位置図(S=1/25,000)

1 はじめに

金沢城二ノ丸は、近世前期以降、金沢城の中枢部であり、御殿が設けられていました。今回の埋蔵文化財確認調査は、遺構の位置や内容等を確認し、二ノ丸御殿復元整備の基礎資料を取得すると共に、遺構の確実な保存を図ることを目的として、令和2年度から実施しています。

2 ニノ丸の来歴

二ノ丸は、金沢城の中央西寄りに位置します。寛永8年（1631）の大火により、本丸御殿が焼失し、同年に二ノ丸は敷地の大造成が行われるとともに、御殿が創建され、以後藩政の中心となりました。

御殿は、その機能から「おもてむき表向」「おいままわ御居間廻り」「おくむき奥向」の大きく3つに区分されます。「表向」は御殿の東側に位置し、城内儀礼や藩士たちの公務の場でした。「御居間廻り」は藩主の生活空間、政務をとる場所として機能しました。「奥向」（広式）は、藩主の母や側室・子女、奥女中の生活空間でした。

寛永期の創建後、御殿は度々改修が行われました。中でも宝暦9年（1759）・文化5年（1808）の2度にわたる火災とその後の再建は大きな画期となり、これらを指標に前期・中期・後期に区分しています。

明治4年（1871）の廃藩により、城地は兵部省（のち陸軍省）に受け継がれました。御殿建物は兵舎に転用されて存続しますが、明治14年（1881）の火災により、近世以来の威容は失われました。その後、明治31年（1898）には第九師団司令部庁舎が設営され、戦後金沢大学が開学したのちも、大学事務局として利用されていました。

3 調査の成果

(1) 検出遺構の概要

今年度の調査は、昨年度から継続している範囲に加えて、また、新たに広縁西側に範囲を広げて、式台北・実検ノ間・虎ノ間・広縁等を対象に行いました。

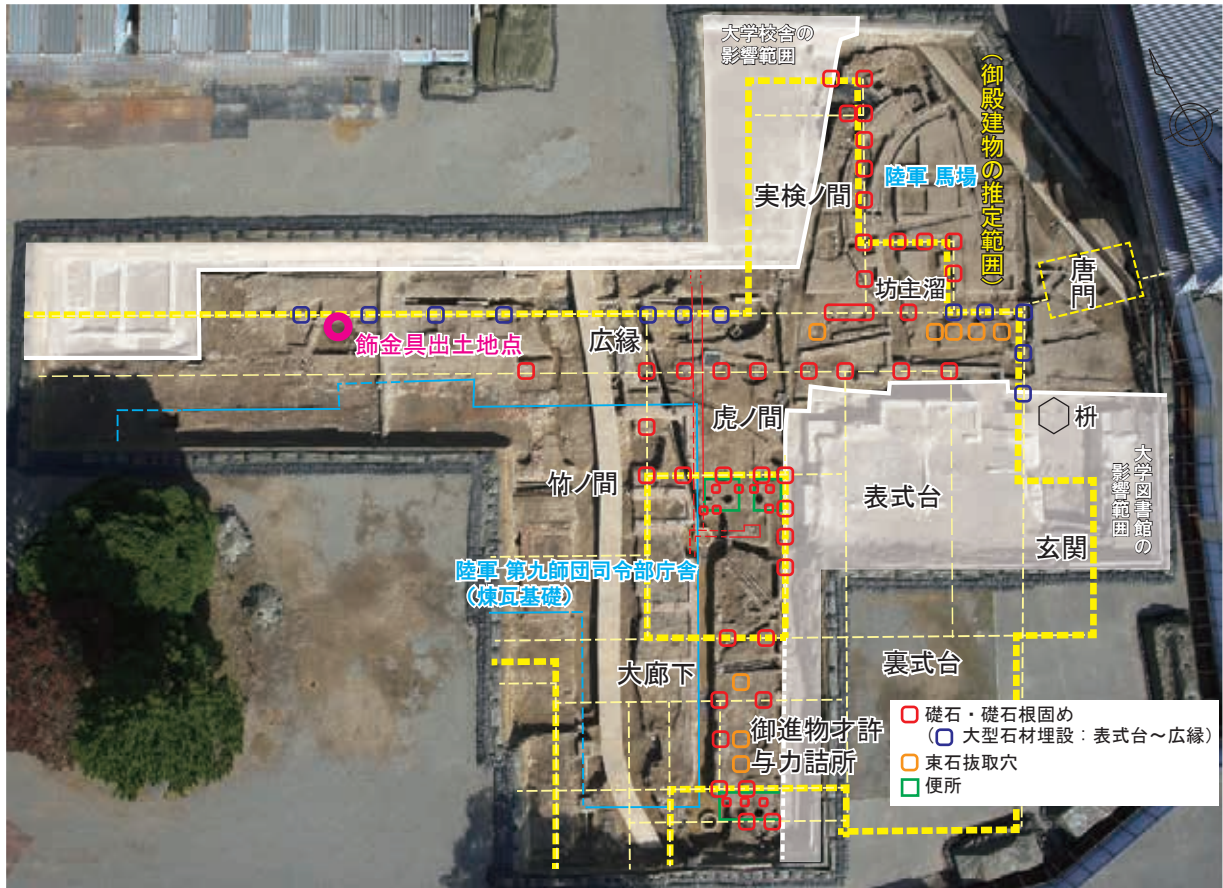


図2 調査区平面 垂直写真(S=1/500)

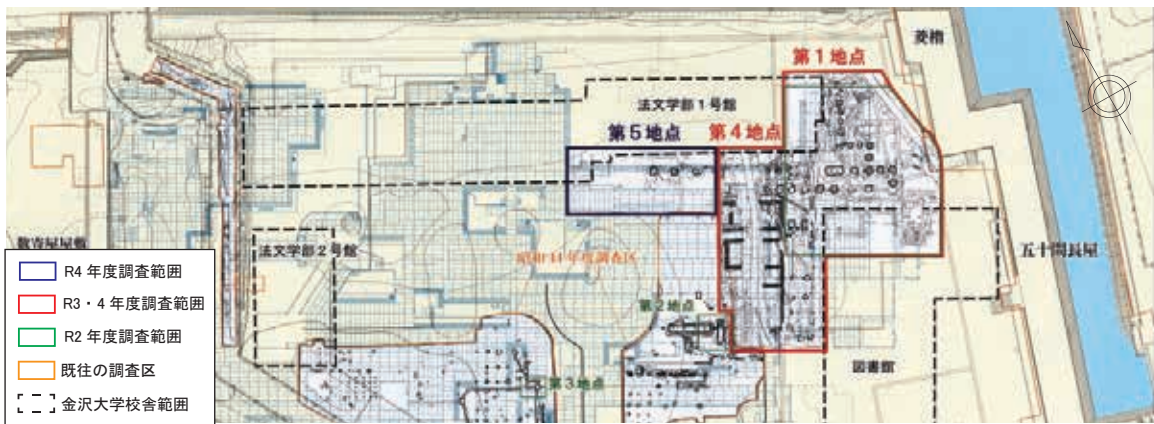
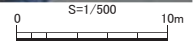


図3 調査区位置図 (S=1/1,500)

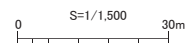


図4 礎石根固め (大型石材埋設タイプ)



図5 礎石根固め (川原石充填タイプ)

現地地表下約1mで明治14年(1881)に焼失した御殿の地盤を検出し、建物の柱を支える礎石根固めを確認しました。これらは表式台から虎ノ間・竹ノ間へと延びる広縁両側、実検ノ間及び坊主溜^{ぼうずだまり}、虎ノ間から御進物才許与力詰所^{ごしんもつさいきよよりきつめしよ}にかけての柱列に対応します。

表式台から広縁にかけての礎石根固めには、上面を平坦に均した1辺50～90cm前後の大型石材(戸室石)1石を据え置いて、周囲を土と川原石で充填するタイプ(大型石材埋設タイプ 図4)と、幅1.2～1.4m、深さ約1mの穴に、川原石や戸室石の割材を充填するタイプ(川原石充填タイプ 図5)の2種類が確認されています。

両タイプともに礎石は、明治14年の火災以後に抜きとられ残っておらず、その抜取穴の窪みには瓦が溜まっていた。

大型石材埋設タイプは、広縁北側等の外周に位置しています。建物外から見えることから、規格的な切石材の礎石が置かれていたと考えられます。抜取穴内部に溜まっていた瓦等を取り除くと、礎石を固定するために、平坦面を内側に向けた川原石等が四方に配置される状況(図6)を確認しました。その内部の大きさから礎石の寸法は1辺40cm程度のサイコロ状と推定されます。



図6 礎石抜取穴(大型石材埋設タイプ)

大型石材の上面高は式台周辺から竹ノ間に向かって高くなっていて、礎石上面のレベルは水平でなく、高低差があったと考えられます。

川原石充填タイプは、建物の内側に位置しています。礎石抜取穴下部がやや傾斜している例(図7)から、下面が不定形であり、規格的な切石材ではない礎石が用いられていたことがうかがえます。



図7 礎石抜取穴(川原石充填タイプ)

また、広縁東部、大廊下から御進物才許与力詰所の範囲では、浅い小穴列(図8)を確認しました。これらの遺構は礎石根固め列と平行する位置関係にあり、床を支える束の基礎である束石の抜取穴とみられます。

虎ノ間南側の空地、御進物才許与力詰所南側では複数の略円形をした土坑(図9)を確認しました。『二之丸御殿建物指図』(金沢市立玉川図書館蔵)に描かれる便所の位置と整合します。土坑には、便槽として用いられていた桶



図8 広縁内側に平行する束石抜取穴

の部材が残っていました。土坑内は明治 14 年の火災以後に砂で埋められ、廃絶したと考えられます。

(2) ニノ丸御殿の遺構のまとめ

調査の結果、大学施設等により失われたものを除き、江戸後期の御殿建物の柱を支える礎石根固めの遺構を確認し、御殿北東部の建物の位置を特定しました。礎石抜取穴の調査から、大型石材埋設タイプには規格的な切石材が、川原石充填タイプには規格的な切石でないものがそれぞれ礎石として用いられたと考えられます。また、大型石材埋設タイプの礎石根固めの一部において、平坦面を内側に向けた川原石等が四方に配置される例が確認され、そこから礎石の寸法・形状が推定できました。さらに、礎石根固めの大型石材埋設タイプの上面高は式台周辺から竹ノ間にかけて高くなっていて、このことから、礎石の上面のレベルに高低差があったと考えられます。

(3) 出土飾金具について

竹ノ間下層の火災片付け土坑から飾金具（釘隠）が出土しました。出土時には砂や溶着物・錆等に覆われていて、詳細がわかりませんでした。画像分析（X線CT）を実施したところ、表面に花菱文様が浮かび上がり、後期ニノ丸御殿の内外装を記録した『二之御丸御殿御造営内装等覚及び見本・絵形（内装等覚）』（金沢市立玉川図書館蔵）にみえる絵形と類似していることが判明しました。

この資料は、出土層位から宝暦 9 年（1759）年の火災で焼失した前期御殿に属し、後期御殿の段階より古い製品ですが、『内装等覚』には式台や門・塀といった「表向」の外装に類品が認められることから、江戸前期の金具の意匠が、後期にまで受け継がれていることがわかりました。

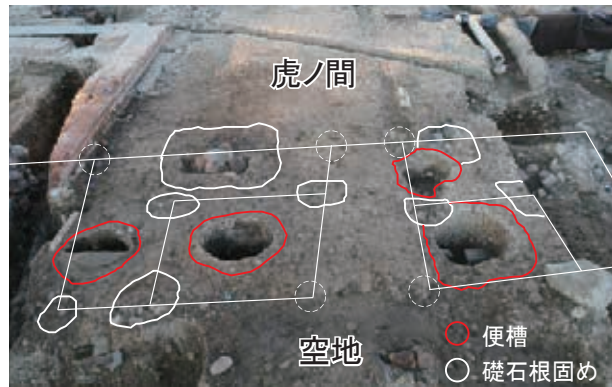


図9 虎ノ間南側の便所遺構



図10 調査区南西側 作業風景

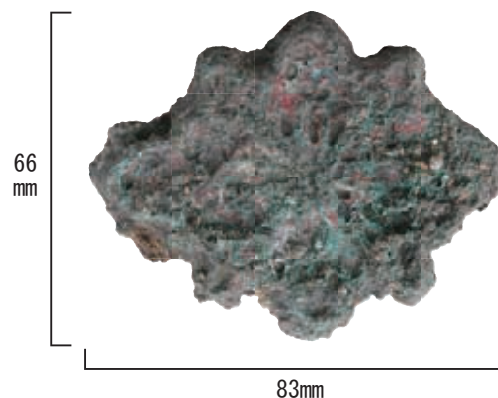


図11 出土した飾金具（釘隠）

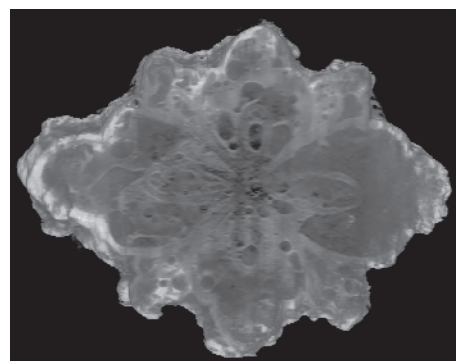


図12 X線CT画像

京都国立博物館撮影